

看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究 (2)

大江 基 加城貴美子 陣田 泰子 國岡 照子 柴原 君江
竹内 文生 美田 誠二 青木 康子 井澤 方宏

要 旨

本学看護学生の集団の特性を明らかにする目的で、TAOK (Transactional Analysis and OK Positions)、YGテスト (矢田部ギルフォード性格検査)、POMS (Profile of Mood States)、SE (Self-Esteem) とSA (Self-Acceptance Scale) を実施し、その結果と各テスト間の関係を検討した。その結果は以下のごとくであった。

1. 「基本的構え」で、1996年度1年次生は自己否定・他者肯定と自他否定が多くみられた。1995年度1年次生は自他否定、次いで自他肯定が多く、両年度間で5%水準の有意差がみられた。
2. ピークエゴグラムで最も多かったのは両年度ともAC優位で、約半数みられた。
3. OKエゴグラムとPOMSの関連では、1996年度1年次生は「自他肯定」の「基本的構え」の者は気分的に安定していた。
4. YGテストについて、1995年度1年次生はB型とD型優位の双極分布を示したが、1996年度1年次生はB型優位であり、D型が減少し、その反面A型とE型が増加した。
5. YGテストの理想自己と現実自己の乖離が小さい者ほど、自己を受容しており、自己受容の指標として有効であることが示された。
6. SA (自己受容尺度) と、SE (自尊感情) およびYGテストの自己受容指標の間には相互に正の関連がみられた。

キーワード：交流分析 YG性格検査 自己受容 POMS Self-Esteem 自己成長

I. はじめに

看護大学に入学してくる学生は、入学の動機は様々であっても、将来何らかの形で人の健康に関与する、すなわち対人的な関わりを志向しているといえよう。健康に関する看護の専門職として、よりよいヒューマンケアリングを行うためには人間の総合的理解が必要であることは論を待たないが、相手を理解し、受容する前提としては自分自身が自己を理解し、自分にも、相手に対しても開かれており、肯定的に受け止めることが望ましい。

青年期の発達課題は、自我同一性の確立であり、本学学生がどのように自己を捉え、自己像を形成しているか、またそれが広く看護に関わる学びをすすめるなかでどのようなプロセスを経ながら形成されるかを理解することは重要である。

本研究では、前報¹⁾に続き、看護の専門職を目指

して入学してくる学生の集団特性、自己理解度や、自他への態度などを新入学生を加えて検討する。また、対人的関わりをしていく上で、まず自分自身を肯定的に受け容れることが肝要であり、「自己受容」は重要な特性であると考えられる。今回は新たに沢崎ら^{2) 3)}によって開発された自己受容測定尺度を導入し、検討を加える。

II. 研究方法

1. 対象：本短期大学の1995年度1年次生80名、1996年度1年次生80名を対象とし、研究に同意の得られた1995年度1年次生76名、2年次生78名および1996年度1年次生の77名。

2. 内容：①Transactional Analysis and OK Positions (以下TAOKと略す) ②YG性格テスト

(矢田部ギルフォード性格検査 以下YGテストと略す) ③自己受容測定尺度 (Self-Acceptance Scale 以下SAと略す) ④Profile of Mood Sates (以下POMSと略す) ⑤Self-Esteem (以下SEと略す) ⑥学生の属性

3. 方法: 各測定用紙と半構成的質問紙による調査

4. 期間:

1995年度1年次生は1995年6月9日～7月21日

1996年度1年次生は1996年4月12日～6月29日

1995年度2年次生は1996年4月12日

5. 分析方法: 各測定尺度の全体を集計し、各尺度間で χ^2 検定、t検定、一元配置分散分析を行った。統計処理は、汎用統計学パッケージSPSSを用いた。

Ⅲ. 尺度の説明

1. TAOK (Transactional Analysis and OK Positions)

TAOKは、交流分析の考え方に基づいて作られた検査であり、水野⁹⁾により開発された心理検査で、120問からなるリッカート・タイプの尺度である。自分の中の自我状態を客観的に知る方法としてのエゴグラムと、自己及び他者に対する「基本的構え」を知るOKグラムからなっている。

2. YG性格テスト

YGテスト⁵⁾は通常の12性格特性、性格プロフィールの5種類のほかに、YGによる自己受容の指標として理想自己と現実自己の差 (I-R差) を用いた。これは12の各特性について、各個人の理想自己得点と現実自己得点の差の絶対値を合計した値をその個人の得点とした。

3. 自己受容測定尺度 (Self-Acceptance Scale)

SA尺度は自分のありのままの姿を受け入れる程度を測る尺度であり、沢崎³⁾によって開発された。自己受容とは自己をありのままに受け入れることであり、よい点を肯定し、悪い点を否定するような判断を越えた、自己の存在全体に関する受容である。

本尺度は自己を表現する26項目の質問からなり、各項目が自分に当てはまるかどうか評定させ

た後、そういう自分をどう思うか、①「それでかまわない、あるいは気にならない」か、②「それではいやだ、あるいは気になる」かを判断させる。質問が自分に当てはまるかどうかは採点せず、「それでかまわない、あるいは気にならない」を1点、「それではいやだ、あるいは気になる」を0点とした合計を自己受容点とする。

26項目はさらに数量化Ⅲ類による多変量解析の結果、Ⅰ「開放性」(得点範囲0～7点)、Ⅱ「真面目さ」(0～10点)、Ⅲ「自己中心性」(0～9点)の3因子が抽出されている。SA尺度は1995年度2年次生のみ実施した。

4. POMS (Profile of Mood States)

POMS⁶⁾は気分を評価する質問紙法の一つとしてD.M.McNairらにより米国で開発された。「緊張不安」、「怒り敵意」、「活気」、「疲労」、及び「混乱」の6つの気分尺度を同時に測定できる(以下、それぞれT-A, D, A-H, V, F, C尺度と略す)ものである。

5. Self-Esteem

Self-Esteemは、「自己愛」を意味する用語である。本来SEは、人格の基底部に備わっているはずのものであり、容易に数量化できないが、その一部を様々な尺度によって知ろうとするものである。

Rosenberg, M.⁷⁾によるSEの質問紙の日本語版を松下⁸⁾が作成し、その後、星野⁹⁾、菅¹⁰⁾により検証されてきた。ここでは、菅の方法を用いた。

方法としては、菅の4段階尺度を用い、自尊感情を問う10の質問項目の合計点を得点とした。合計得点の19点を低得点群、20～29点を通常得点群、30点を高得点群の3群に分けた。

Ⅳ. 結果

対象看護学生の年齢は、1995年度1年次生は平均19.1歳で、18～36歳の範囲であった。1996年度生は平均19.5歳で、18～34歳の範囲であり、77名中男性3名であった。

A. TAOK

1. 「基本的構え」による割合

1996年度1年次生と1995年度1年次生のTAOKの

結果得られた「基本的構え」を Table 1 に示した。

Table 1 学年別の入学時のOK グラムの型分類

	1996年度 1 年次生		1995年度 1 年次生	
	n	%	n	%
自己肯定・他者肯定	12	15.6	15	19.7
自己肯定・他者否定	8	10.4	10	13.2
自己否定・他者肯定	28	36.4	12	15.8
自己否定・他者否定	26	33.8	38	50.0
そ の 他	3	3.9	1	1.3
Total	77	100.1	76	100.0

1995年度 1 年次生は、「自他否定」が最も多く 50.0 %、次いで「自他肯定」の 19.7% であった。1996年度 1 年次生は、「自己否定・他者肯定」が最も多く 36.4%、次いで「自他否定」の 33.8% であった。1995年度 1 年次生と 1996年度 1 年次生とを比較すると 1995年度 1 年次生が「自他否定」が多く 5 % 水準で有意差がみられた。

2. ピーク・エゴグラム

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番高い部分は Figure 1 に示すように、AC 優位が最も多く、

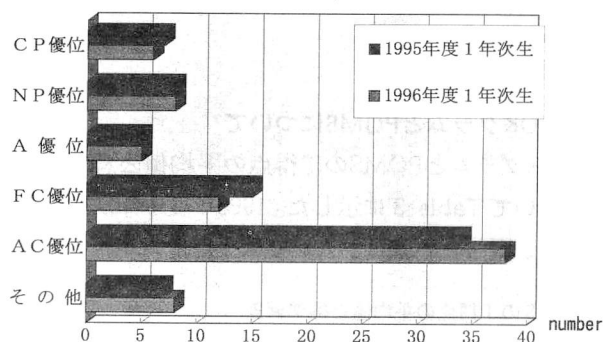


Figure 1 Peak Egogram

1995年度 1 年次生が 34 名 (44.7%)、1996年度 1 年次生は 38 名 (49.4%) であった。次いで、FC 優位で、1995年度 1 年次生が 15 名 (19.7%)、1996年度 1 年次生は 12 名 (15.6%) であったが有意差はみられなかった。両年度生で最も少なかったのは A 優位であった。

3. ボトム・エゴグラム

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番低い部分の割合は Figure 2 に示すように、1995年度 1 年次生は A 低位が最も多く 26 名 (34.2%)、次いで CP 低位の 23 名 (30.3%) であった。1996年度 1 年次生は、CP 低位で 26 名 (33.8%)、次いで A 低位の 22 名

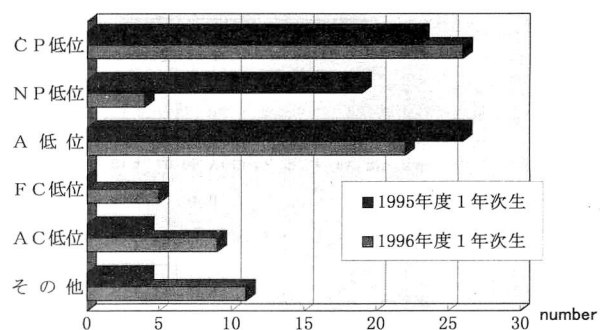


Figure 2 Bottom Egogram

(28.8%) であった。両年度生で最も少なかったのは 1995年度 1 年次生の AC 低位であった。

4. OK グラムと OK エゴグラムの平均値と標準偏差について

Table 2 (次ページ) に示すように、1996年度 1 年次生についてみると、批判する私 (CP) で最も得点の高いのは「自己肯定・他者否定」の 55.88、最も低いのは「自己否定・他者肯定」の 43.11 であった。「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」、「自己肯定・他者否定」と「自他否定」とに 5 % 水準で有意差がみられた。「自他肯定」と「自他否定」、「自己肯定・他者否定」と「自己否定・他者肯定」とに 0.1% 水準で有意差がみられた。

やさしい私 (NP) で最も点数が高いのは「自他肯定」の 55.75、最も低いのは「自他否定」の 48.04 で、「自己否定・他者肯定」と「自他否定」とに 1 % 水準の有意差がみられた。

自由な私 (FC) で最も高いのは「自他肯定」の 58.42、最も低いのは「自己否定・他者肯定」の 51.96 であり、「自他肯定」と「自他否定」とに 5 % 水準、「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」とに 1 % 水準の有意差がみられた。

人に合わせる私 (AC) では最も高いのは「自他否定」の 59.23 で、最も低いのは「自己肯定・他者否定」の 51.00 であった。「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」、「自己肯定・他者否定」と「自他否定」とに 1 % 水準の有意差がみられた。

1995年度 1 年次生は、やさしい私 (NP) が「自他肯定」と「自他否定」、「自己否定・他者肯定」と「自他否定」とで 1 % 水準、「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」とに 5 % 水準の有意差がみられた。1996年度 1 年次生と 1995年度 1 年次生を比較すると、

Table 2 入学年度別OK グラムの型とOK エゴグラム の平均値と標準偏差

	自己肯定・他者肯定 A=12 B=15	自己肯定・他者否定 A=8 B=10	自己否定・他者肯定 A=28 B=12	自己否定・他者否定 A=26 B=38
批判する私(CP)	A 50.67 ± 10.65 B 46.13 ± 9.82	A 55.88 ± 11.53 B 51.40 ± 12.96	A 43.11 ± 7.76 B 41.67 ± 7.20	A 46.69 ± 9.14 B 47.66 ± 10.82
やさしい私(NP)	A 55.75 ± 3.93 B 55.33 ± 5.35	A 51.00 ± 14.78 B 45.40 ± 16.16	A 54.57 ± 7.75 B 51.08 ± 3.70	A 48.04 ± 7.14 B 38.92 ± 11.57
考える私 (A)	A 47.08 ± 11.43 B 44.67 ± 8.97	A 46.00 ± 9.93 B 45.60 ± 8.02	A 48.93 ± 9.79 B 44.92 ± 9.91	A 48.19 ± 10.34 B 42.95 ± 8.72
自由な私 (FC)	A 58.42 ± 5.74 B 54.07 ± 5.51	A 56.50 ± 5.81 B 53.90 ± 5.97	A 51.96 ± 6.98 B 52.42 ± 7.05	A 53.42 ± 7.56 B 53.00 ± 8.10
人に合わせる私(AC)	A 53.67 ± 13.65 B 49.27 ± 11.47	A 51.00 ± 15.18 B 47.60 ± 9.08	A 59.11 ± 11.77 B 60.67 ± 9.00	A 59.23 ± 7.69 B 57.71 ± 9.76

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001 A=1996年度1年次生 B=1995年度1年次生

やさしい私 (NP) の「自他否定」で1996年度1年次生の方が高く0.1%水準で、考える私 (A) で「自他否定」で1996年度1年次生の方が高く5%水準で有意差がみられた。

5. 意志マップの型

意志マップの型で、1996年度1年次生で最も多いのは両方のPが弱い型42.9%、次いで両方のPが強い型33.8%であった。1995年度1年次生で最も多いのは両方のPが弱い型57.9%、次いで両方のPが強い型13.2%であった。

6. 感情マップの型

感情マップの型で、1996年度1年次生で最も多いのは両方のCが強い型33.8%、次いでACが強い型31.2%であった。1995年度1年次生で最も多いのはACが強い型35.5%、次いで両方のCが弱い型22.4%であった。

7. OKグラムとPOMSについて

OKグラムとPOMSのT得点の平均値と標準偏差について Table 3 に示した。1996年度1年次生をみると、緊張不安 (T-A) では「自他肯定」と「自

Table 3 入学年度別OK グラムの類型とPOMSのT得点の平均値と標準偏差

	自己肯定・他者肯定 A=12 B=15	自己肯定・他者否定 A=8 B=10	自己否定・他者肯定 A=28 B=12	自己否定・他者否定 A=26 B=38
緊張不安 (T-A)	A 50.33 ± 10.40 B 50.00 ± 10.54	A 52.75 ± 12.19 B 54.20 ± 12.78	A 56.54 ± 11.88 B 53.67 ± 12.54	A 58.04 ± 11.00 B 55.08 ± 9.61
抑うつ・落込み (D)	A 45.83 ± 6.56 B 50.04 ± 10.34	A 49.88 ± 10.44 B 53.90 ± 14.35	A 51.61 ± 8.86 B 54.50 ± 11.53	A 55.73 ± 9.72 B 56.95 ± 9.36
怒り・敵意 (A-H)	A 42.67 ± 5.78 B 47.67 ± 8.68	A 46.13 ± 7.45 B 51.40 ± 11.46	A 44.96 ± 7.90 B 49.67 ± 9.71	A 50.04 ± 8.18 B 51.95 ± 10.05
活気 (V)	A 60.83 ± 11.50 B 51.67 ± 11.11	A 50.50 ± 8.64 B 45.70 ± 10.78	A 49.86 ± 9.04 B 46.67 ± 13.42	A 44.73 ± 7.77 B 48.21 ± 10.35
疲労 (F)	A 52.75 ± 10.06 B 50.48 ± 9.20	A 53.38 ± 9.22 B 59.50 ± 12.50	A 55.50 ± 9.69 B 54.17 ± 10.87	A 57.73 ± 10.20 B 54.79 ± 8.43
混乱 (C)	A 49.50 ± 9.49 B 56.73 ± 12.79	A 47.38 ± 8.65 B 58.90 ± 13.73	A 55.75 ± 9.68 B 58.67 ± 12.61	A 59.77 ± 10.52 B 58.24 ± 9.34

* P<0.05 ** P<0.01 *** P<0.001 A=1996年度1年次生 B=1995年度1年次生

他否定」とで「自他肯定」の得点が低く5%水準で有意差がみられた。抑うつ－落込み(D)では「自他肯定」の得点が最も低く、最も高いのは「自他否定」であり、1%水準で、「自他肯定」と「自他否定」、「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」とに5%水準の有意差がみられた。活気(V)では、「自他肯定」が最も高く、「自他否定」が最も低かった。「自他肯定」と「自己肯定・他者否定」、「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」、「自己否定・他者肯定」と「自他否定」とに5%水準の有意差がみられた。「自他肯定」と「自他否定」とでは0.1%水準の有意差がみられた。混乱(C)では、「自己肯定・他者否定」が最も得点が低く、「自他否定」が最も得点が高かった。「自他肯定」と「自他否定」、「自己肯定・他者否定」と「自他否定」とに1%水準、「自己肯定・他者否定」と「自己否定・他者肯定」とに5%水準の有意差がみられた。1995年度1年次生は、抑うつ－落込み(D)で「自他肯定」が最も得点が低く、「自他否定」が最も高く、両者間で5%水準で有意差がみられた。1996年度1年次生と1995年度1年次生との比較では有意差はみられなかった。

平均得点

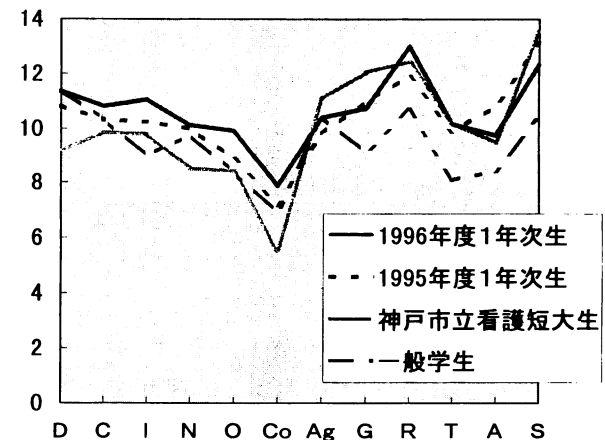


Figure 3 YG性格テスト12特性

B. YG性格テスト

1. 本学学生のYG性格テストによる特徴

第1報に引き続き、本学学生の性格傾向を神戸市立看護短期大学¹¹⁾及び一般学生(標準化資料)と比較した。被験者は新に1996年度1年次生のデータを加えて4グループとした。各グループのYG性格検査の12特性の平均値はTable 4及びFigure 3に示すとおりである。

Table 4 YG性格テスト12特性型の平均値の比較

	1996年度 1 年次生		1995年度 1 年次生		神戸短大生		一般学生	
	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD
高得点——低得点								
D 抑うつ性大——小	11.36	6.05	10.82	5.59	9.17	5.34	11.37	5.25
C 気分変化大——小	10.81	4.81	10.33	4.63	9.86	4.89	10.33	4.97
I 劣等感強——弱	11.05	5.11	10.25	6.01	9.80	4.97	9.00	5.38
N 神経質強——弱	10.12	5.12	9.99	5.50	8.51	4.26	9.76	4.86
O 主観的——客観的	9.91	3.34	8.89	4.07	8.42	3.91	8.36	4.06
Co 非協同的——協同的	7.87	4.19	7.17	4.18	5.51	3.15	6.88	3.81
Ag 攻撃性強——弱	10.39	4.28	9.80	3.97	11.07	4.11	10.45	4.20
G 活動性高——低	10.74	4.53	10.99	5.41	12.06	4.23	9.10	4.67
R のんき——のんきでない	13.00	4.87	11.92	3.91	12.45	4.15	10.70	5.11
T 内省性低——高	10.16	4.48	9.89	4.28	10.20	4.05	8.08	4.53
A 支配的——服従的	9.75	5.22	10.82	4.69	9.49	4.63	8.42	5.29
S 社会的外向——内向	12.34	5.31	13.12	4.90	13.56	4.33	10.40	5.28
n	77		76		144		1974	
	* p<0.05		** p<0.01		*** p<0.001			

本学の1996年度1年次生のプロフィールは1995年度1年次生とはほぼ平行関係にあり、全体としては似た傾向である。

2. 4 グループの平均値の比較

4 グループの間で有意差のあった項目は Table 4 に示すとおりである。

1) 本学の1996年度1年次生と1995年度1年次生を比較すると、平均点で1以上の差がある項目は、O (非客観性)、R (のんきさ) で1996年度1年次生の方がやや上回り、A (支配性) で1995年度1年次生の方が上回っているが、有意差のある項目はみられ

Table 5 YGテスト類型の比較

類型	1996年度1年次生		1995年度1年次生		神戸市立看護短大生	
	n	%	n	%	n	%
A	16	20.8	11	14.5	28	19.6
B	24	31.2	25	32.9	43	30.1
C	6	7.8	5	6.6	17	11.8
D	17	22.2	23	30.3	48	33.6
E	14	18.2	12	15.8	8	4.9
n	77	100.2	76	100.1	144	100.0

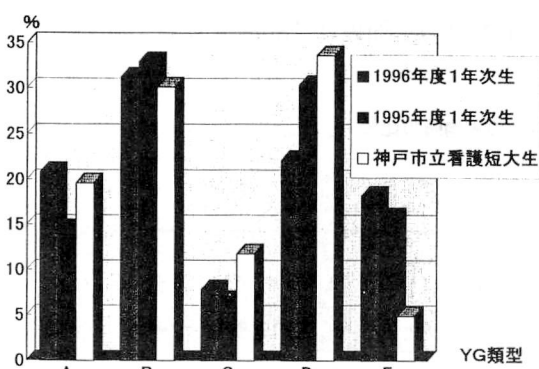


Figure 4 YG 5 類型 3 グループ比較

なかった。

2) 1996年度1年次生と神戸市立看護短期大学生 (以下神戸短大生と略す) を比較すると、D、N、O、Co、Gの5項目で有意差があり、本学学生の方が抑うつ的、神経質、主観性の項目でより得点が高く、協調性と活動性では逆に得点が低くなっていた。特に協調性では顕著な差 ($p < 0.001$) がみられた。

3) 次に1996年度1年次生と一般学生を比較すると、有意差のあった項目は、I、O、Co、G、R、T、A、Sで、1996年度1年次生の方が情緒的な不安定性を示す、劣等感、主観性、非協調性でより得点が高く、活動性、のんきさ、思考的外向性、支配性、社会的外向性などの行動的傾向を表す各項目で得点が高くなっていた。

3. YGプロフィール (5 類型) について

YGプロフィールを、典型、準型、亜型の15タイプに分類し、さらにそれらをA型、B型、C型、D型、E型の5類型にまとめた。

本学学生及び神戸短大生の各類型の度数分布は Table 5 及び Figure 4 に示すとおりである。その結果、1995年度1年次生及び神戸短大生はB型、D型優位の双極分布となっていたが、1996年度1年次生は他の2グループに比較してD型が減少し、その反面A型とE型が増加している。E型は3グループ中でもっとも多く18.2%であった。

4. 理想の自己像と現実の自己像との比較

1) 1996年度1年次生と1995年度1年次生の比較

理想の自己像を想定して評定させた結果はTable 6

Table 6 現実自己像と理想自己像12特性型の平均値の比較

	1996年度 1 年次生				1995年度 1 年次生			
	現実自己		理想自己		現実自己		理想自己	
	\bar{x}	\pm SD	\bar{x}	\pm SD	\bar{x}	\pm SD	\bar{x}	\pm SD
高得点——低得点	***							
D 知うつ性大——小	11.36	6.05	1.39	2.69	10.82	5.59	1.64	2.85
C 気分変化大——小	10.81	4.81	3.00	3.26	10.33	4.63	2.69	2.54
I 劣等感強——弱	11.05	5.11	0.75	1.28	10.25	6.01	0.93	1.67
N 神経質強——弱	10.12	5.12	2.08	2.37	9.99	5.50	2.14	2.56
O 主観的——客観的	9.91	3.34	5.16	3.49	8.89	4.07	4.68	3.11
Co 非協調的——協調的	7.87	4.19	3.29	2.96	7.17	4.18	2.99	3.04
A 攻撃性強——弱	10.39	4.28	11.83	3.44	9.80	3.97	10.74	3.63
G 活動性高——低	10.74	4.53	19.00	1.62	10.99	5.41	18.18	3.60
R のんき——のんきでない	13.00	4.87	12.90	3.42	11.92	3.91	11.04	4.17
T 内省性低——高	10.16	4.48	10.35	3.71	9.89	4.28	9.92	3.92
A 支配的——服従的	9.75	5.22	17.55	2.17	10.82	4.69	16.32	3.93
S 社会的外向——内向	12.34	5.31	18.94	2.32	13.12	4.90	18.18	3.85
n	77		77		76		74	
	** $p < 0.05$				*** $p < 0.001$			

に示すとおりである。理想の自己像について、1996年度1年次生と1995年度1年次生を比較すると、両グループとも95%以上がD型を理想としていたが、理想像の12特性で比較すると1996年度1年次生の方が、1995年度1年次生よりも、のんきさ（R）において1%水準、支配性（A）に関して5%水準でいずれも有意差がみられた。

2) 12特性の平均点による比較

1995年度1年次生については、Ag、R、T以外の9特性で理想自己と現実自己の間に有意差（ $P<0.001$ ）がみられた（前報）が、1996年度1年次生ではR、Tのみ有意差がなく、ほかはすべて有意差（ $P<0.001$ ）がみられた。プロフィールとしては情緒安定、活動的、外向的の典型的なD型を理想像として描いていた。

3) 理想自己と現実自己との差「I-R差」について

YG12特性について、理想自己のプロフィールと現実のそれとの距離をYGテストによる自己受容度の指標として、1995年度1年次生と1996年度1年次生で比較したが、1995年度1年次生のI-R差の平均が76.2、1996年度1年次生の平均が80.9で有意差はみられなかった。

5. 自己受容について

1) YGテストと基本的構えとの関連

1996年度1年次生について、YGテストの理想自己と現実自己の差すなわち「I-R差」をYGテストによる自己受容の指標として、TAOKの基本的構えの自己肯定との関連を検討した。自己肯定の指標としては「自他肯定」と「自己肯定・他者否定」を合わせて自己肯定者とし、「自己否定・他者肯定」と「自他否定」を自己否定者の指標とした。「I-R差」の大小2群と、自己肯定者と自己否定者の2群の χ^2 検定を行った。その結果Table 7に示すとおり、2つの指標の間に有意差がみられた

Table 7 理想自己と現実自己との差と自己への態度との関連

		I-R差		計
		小 (85点以下)	大 (86点以上)	
TAOK	自己肯定	14	5	19
	自己否定	20	32	52
	計	34	37	71

$$\chi^2=6.918 \quad df=1 \quad p<0.01$$

($p<0.01$)。

次に、I-R差とTAOKの他者肯定者との関連を検討した。他者肯定の指標としては「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」を合わせて他者肯定、「自己肯定・他者否定」と「自他否定」を合わせて他者否定の指標とし、自己受容度の指標として「I-R差」を用いて χ^2 検定を行ったが、特に関連はみられなかった。

2) YGテストとSE自尊感情尺度との関連

1996年度1年次生に関してYGテストの理想自己と現実自己の差すなわち「I-R差」の大小2群と、自尊感情の高、中、低の3群の χ^2 検定を行った。その結果、Table 8に示すとおり有意差がみられた（ $P<0.01$ ）。

3) SA自己受容尺度について

1995年度2年次生についてはSA自己受容度の尺度を実施し、一般大学生の資料¹²⁾との比較を行った。その結果Table 9に示すとおり本学学生（1995年度2年次生）と一般男子学生との間では、開放性において1%水準、真面目さにおいて0.1%水準で有意差があり、両因子とも一般男子の方が自己受容度が高くなっていた。また一般女子学生との間では、開放性と真面目さでは差がみられず、自己中心性において本学学生の方が自己受容度が高く、有意差がみられた（ $P<0.05$ ）。

4) SA自己受容度とYG自己受容度との関連

SA自己受容度とYG自己受容度との関連をみるた

Table 8 理想自己と現実自己との差と自尊感情との関連

		I-R差		計
		小 (85点以下)	大 (86点以上)	
自尊感情	低 (19点以下)	0	9	9
	中 (20～29点)	26	25	51
	高 (30点以上)	12	5	17
計		38	39	77

$$\chi^2=11.891 \quad df=2 \quad p<0.01$$

Table 9 自己受容尺度平均値の比較

下位尺度	1995年度2年次生 $\bar{x} \pm SD$		一般男子学生 $\bar{x} \pm SD$		一般女子学生 $\bar{x} \pm SD$	
開放性	4.59	2.20	5.57	2.06	5.12	2.00
真面目	6.26	2.20	7.67	2.82	6.68	2.37
自己中心	6.64	2.10	7.00	2.42	5.79	2.16
n	78		174		253	

$$* p<0.05 \quad ** p<0.01 \quad *** p<0.001$$

めに、1995年度入学生のYGテスト（1年次実施）とSA自己受容尺度（2年次実施）のデータを χ^2 検定した。その結果 Table 10 に示すとおりSA自己受容尺度とYGの自己受容の指標「I-R差」の間に有意差がみられた（ $P<0.001$ ）。

5）SA自己受容度とSE自尊感情との関連

1995年度2年次生について自己受容尺度の高い自己受容群と受容度の低い自己否定群及び自尊感情の低得点群、通常得点群、高得点群の3群の χ^2 検定を行った。その結果 Table 11 に示すとおり、SA自己受容度とSE自尊感情の間に有意差がみられた（ $P<0.05$ ）。

V. 考 察

A. TAOK

1. 「基本的構え」

TAOKの結果「基本的構え」では、1996年度1年次生は「自己否定・他者肯定」が多く、次いで「自己否定」であり、集団のOKグラム・パターンでみると自己否定傾向が約7割みられる。1995年度1年次生も「自己否定」が多く、次いで「自己肯定」であるが、集団OKグラム・パターンでは約7割近くに自己否定傾向がみられる。本研究の対象は「青年期」の最後の時期にあたり、自己発見あるいは自我の自律を求めて模索する時期である。この時期に看護を学ぶ中で自己をみつめる機会をつくることは大切である。入学時の「基本的構え」が看護を学ぶ中でどの様に変容するかを追跡していく必要がある。

2. OKグラム

集団全体の行動傾向は、エゴグラムが一番高い部分の分布状態で知ることができるといわれている¹³⁾。本研究で得られたOKグラム最高値（優位）をみると、AC優位が1996年度1年次生は約半数を占め、

Table 10 理想自己と現実自己との差と自己受容尺度の関連

		I - R 差		
		小 (75点以下)	大 (76点以上)	計
自己受容度	高 (18点以上)	2 7	1 0	3 7
	低 (17点以下)	9	2 7	3 6
	計	3 6	3 7	7 3

$\chi^2 = 16.800$ $df = 1$ $p < 0.001$

1995年度1年次生も4割以上とかなり多い。ACは、その得点が高いと自分を抑え、社会規範に従って行動しようとするが、高くなりすぎると自分の自然な感情を抑圧し、周囲に迎合しようとする傾向が強くなる¹⁴⁾といわれている。加藤ら¹⁵⁾は15～19歳の一般女子学生と看護学生の2集団のエゴグラムを比較している。その結果、看護学生の集団は一般学生よりACがかなり高い結果となっていた。中山ら¹⁶⁾の結果も同様であった。井佐ら¹⁷⁾は、18～40歳の一般女子と看護学生の2つの集団のエゴグラムを比較しているが、両方の集団がACが高い結果であり差はみられなかった。このことから、入学時のACは、看護が他職種との関係で仕事を遂行していくのに重要な自我状態が、学年毎にどの様に変容していくのか追跡する必要がある。

3. POMS

1996年度1年次生は、「自己肯定」、「自己肯定・他者否定」、「自己否定・他者肯定」と「自己否定」の関連で活気（V）を除いて、「自己肯定」の方が全体に「自己否定」に比べて得点が低い傾向であり、疲労（F）を除いて「自己肯定」と「自己否定」とに有意差がみられた。これは、「自己肯定」の「基本的構え」が全体的に気分の安定を示していると考えられる。1995年度1年次生は、その点有意差はみられなかった。1995年度1年次生の調査実施時期が入学後4ヶ月を経て前期試験前に実施したことも何らかの影響があったと推測される。POMSは、過去1週間の気分プロフィールの尺度であるため、検査前の教育的環境その他も大きく影響してくると思われる。今後、どの様な状況で変化がみられるかの追跡も必要である。

B. YGテスト

YGテストの12性格特性の平均値でみると、1996年度1年次生は1995年度1年次生と比べて特に差が

Table 11 自己受容尺度と自尊感情の関連

		自 己 受 容 度		計
		高 (18点以上)	低 (17点以下)	
自尊感情	低 (19点以下)	2	8	10
	中 (20～29点)	22	25	47
	低 (17点以下)	14	5	19
	計	38	38	76

$\chi^2 = 8.05$ $df = 2$ $p < 0.05$

なく、ほぼ平行関係にある。しかし神戸看護短大生や一般学生と比較すると、1996年度1年次生は抑うつ性、劣等感、神経質等の情緒の不安定度において上回っている。逆に主観性や協調性の点では下回っている。その反面、活動性、のんきさ、支配性、社会的外向性などの行動性の面では一般学生を大きく越えていた。特に、のんきさ、思考的外向性の差が顕著であり、あまり物事にこだわらない、マイペース的傾向がうかがわれる。

しかし谷嶋ら¹⁹⁾が指摘するように、時代とともにYGテストの平均値が変化しており、特に活動性、のんきさ、思考的外向、支配性、社会的外向などの因子で女性の得点の増加がみられることの表れであるかもしれない。

YGプロフィールの5類型でも1996年度1年次生は1995年度1年次生や神戸看護短大生と似ているものの、D型が減少し、その反面A型とE型が増えている。中でも1995年度1年次生よりもE型が更に上回っていることは気になる点であり、今後の検討を要する。

理想の自己像については、1996年度1年次生も1995年度1年次生と同様、典型的なD型を志向していたが、理想の自己像と現実の自己像との乖離については、両者に特に差はみられない。

自己受容はRogers¹⁹⁾によって提唱された臨床的にも重要な概念である。沢崎²⁰⁾によると自己受容を測定する方法として、従来、現実自己と理想自己のずれを指標とするものと、自己に対する肯定的評価

によるものがあげられるが、沢崎ら²¹⁾は、自尊感情とは異なる、自己の negative な面をも含めた自己をあるがままに受け容れるかどうかを問う「自己受容測定尺度」を開発した。

本研究では「現実自己と理想自己のずれ」をYGの理想像と現実像の12特性の平均点の差の指標「I-R差」で、また「自己の肯定的評価」をTAOKの基本的構えとSE自尊感情尺度で捉え、さらに沢崎ら²¹⁾のSA尺度を導入して相互の関連を検討した。

その結果、理想自己と現実自己の距離、つまり両者の差の絶対値の総和「I-R差」は前報告において自己受容の指標としての有効性が示唆されていたが、1996年度1年次生に関しては更にその傾向が顕著にみられた。すなわち、YGの自己受容度の指標「I-R差」が小さい者ほどTAOKの基本的構えでは「自己肯定」であり、SE自尊感情が高く、またSA自己受容測定尺度で自己受容度が高いことが示された。更に自己受容尺度と、自尊感情の尺度の間にも有意な関連がみられたことから「I-R差」は自己受容の指標としての有効性が示唆される。

VI. 今後の課題

本研究の結果は、開学2年目でもありまだ例数が少ないことから更に例数を増やし今後も検討を重ね、自己への気づき、自己受容、他者受容のあり方について追跡していく必要がある。

引用文献

- 1) 加城貴美子, 大江基他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究, 川崎市立看護短期大学紀要, 第1巻第1号 23-33, 1996.
- 2) 沢崎達夫, 佐藤純子: 大学生の自己受容測定尺度作成の試み, 第26回教育心理学会発表論文集, 366-367, 1984.
- 3) 沢崎達夫, 佐藤純子: 自己受容測定尺度, 堀洋道, 山本真理子, 松井豊編, 心理尺度ファイル, 垣内出版, 1994.
- 4) 水野正憲, 杉田峰康: OKグラムによる自己理解-自我状態と基本的構えの総合的理解-, 交流分析研究, Vol9, No.1-2, 35-42, 1984.
- 5) 八木俊夫: YGテストの実務手引き-人事管理における性格検査の活用-, 日本心理技術研究所, 1992.
- 6) 横山和仁, 荒記俊一: 日本版 POMS手引, 金子書房, 1994.
- 7) Rosenberg, M: Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton University Press, 1965.
- 8) 松下 寛: Self-imageの研究-Self-esteem scaleの作成-, 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 280-281, 1969.
- 9) 星野 命: 感情の心理と教育(2), 児童心理, 24, 1445-1477, 1970.
- 10) 菅佐和子: SE (Self-Esteem) について, 看護研究, 17 (2), 21-27, 1984.
- 11) 大沢正子: 看護学生のパーソナリティの特徴, 神戸市立看護短期大学紀要 創刊号, 131-140, 1982.
- 12) 佐藤純子, 沢崎達夫: 大学生の自己受容に関する研究 (1), 第27回教育心理学会発表論文集, 410-411, 1985.
- 13) 杉田峰康他: TAOK 活用手引き, 適正研究センター, 1980.

- 14) 桂 戴作, 杉田峰康, 白井幸子: 交流分析入門, チーム医療, 1990.
- 15) 加藤美砂他: エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察, クリニカルスタディ, Vol. 9, No. 7, 679-682, 1988.
- 16) 中山久子, 飯田澄美子: 単科大学における看護学生の健康管理に関する研究—自己の成長に向けて—, 聖路加看護大学紀要, No19, 1-12, 1993.
- 17) 井佐真知子他: エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察, 看護実践の科学, 3, 99-102, 1993.
- 18) 谷嶋喜代志, 福田将史, 斉藤朗: YG性格検査の再検討(3) 第60回日本心理学会発表論文集, 29, 1996.
- 19) Rogers, C. R.: Counseling and Psychotherapy, University of Chicago Press 1942.
佐治守夫編, 友田不二男訳, カウンセリング ロジャース全集2, 岩崎学術出版社 1966.
- 20) 沢崎達夫: 自己受容に関する文献的研究(1) —その概念と測定法について—, 筑波大学学校教育部教育相談研究, Vol. 22, 59-67, 1984.

A Basic Research on Nursing College Students' Personality Traits (2)

Motoi OE Kimiko KASHIRO Yasuko JINDA Teruko KUNIOKA Kimie SHIBAHARA
Humio TAKEUCHI Seiji MITA Yasuko AOKI Masahiro ISAWA

Department of Nursing, Kawasaki City College Of Nursing.

Abstract

We conducted personality tests on our nursing students to grasp their group characteristics by using Transactional Analysis and OK Positions, Yatabe Guilford Personality Test, Profile of Mood States and Self-Esteem approaches. We analyzed and compared the data of each test. The findings are as follows;

1. As to "basic attitude", the most 1st. grade students entering in 1996 were I'm Not OK—You're OK and the second most of them were I'm Not OK—You're Not OK. On the other hand, the most 1st. grade students entering in 1995 were I'm Not OK—You're Not OK and the second most of them were I'm OK—You're OK. And the difference between the two groups were statistically significant with 5% level.
2. Their peak egograms showed the highest AC predominance for both groups. About 50% of both groups showed the highest AC predominance in peak egograms.
3. As to the relation of OK egogram with POMS, those who were I'm OK—You're OK showed the stable mood state for the 1st. grade students entering in 1996.
4. While the data of the Yatabe Guilford Test of 1st. graders in 1995 showed a bimodal distribution of B-type and D-type, that of 1st. graders in 1996 showed B-type predominance with less D-type and consequently both A-type and E-type increased.
5. The 1st. graders in 1996 with smaller gap between the ideal and real self-image of themselves showed better self acceptance and the discrepancy score between ideal and real self-image of YG Test was found to be valid index of self-acceptance.
6. Significant positive intercorelation was found among self-Acceptance Scale, Self-Esteem Scale and YG self-acceptance index.

Key words:

Transactional Analysis
Yatabe Guilford Personality Test
Self Acceptance
Profile of Mood States
Self Esteem